子ども・子育て支援セミナーの記録

日時　平成 26 年 11 月 15 日（土）14:00～16:30
場所　岩見沢市教育研究所　小運動場

第１部
岩見沢市子ども・子育てプラン骨子(案)について

岩見沢市教育委員会事務局　鈴木　栄基

子ども・子育て会議と児童数の推移

私からはただいま作成中の岩見沢市子ども・子育てプラン骨子(案)についてご説明いたします。

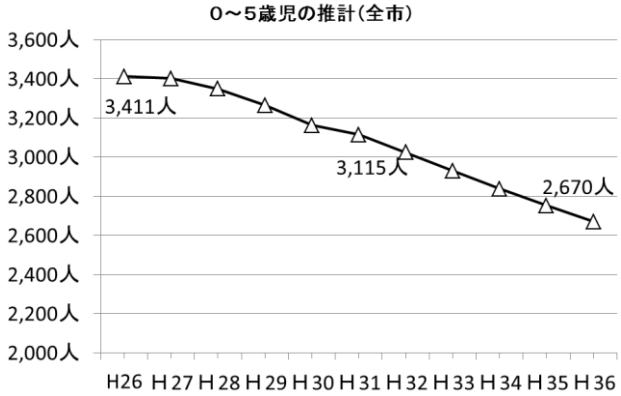
岩見沢市では子育て支援に関する国の新制度に合わせた子ども・子育て支援事業に取り組むために、昨年から子ども・子育て会議を設置し、計画の策定にあたっています。子ども・子育て会議は、お子さんを持つ市民の代表、幼稚園や保育園をはじめとする子育て支援に携わっている事業者の代表、心理学、運動、医療の各分野の学識経験者、合わせて 12 名で構成しています。会議の代表は、本日この後でご講演いただく北海道教育大学の平野直己さんです。

新制度の趣旨は、子どもが主人公であるということです。さらに岩見沢市の目標として、幼児期から学齢期を通して知力と体力を伸ばす環境を整えたい、という視点から検討を開始いたしました。

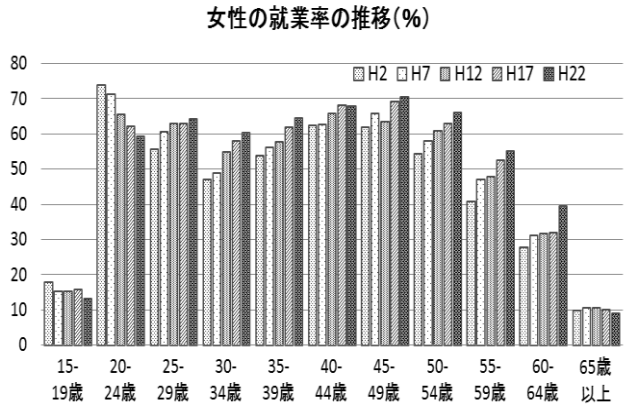
未就学児童の数はこれまでの 10 年間で、約 400 人減少しています。その中で、保育園に入園する０歳児から２歳児の数は、徐々に増加しており、保育園入園児の減少幅はそれほど急激ではありませんでした。

これからの 10 年間はどうなるかといいますと、減少幅はおよそ２倍という推計になります。平成 26 年の４月時点の就学前児童は 3,411 人でしたが、10 年後の平成 36 年４月には 2,670 人、740 人減少すると予想されています。

その背景として女性の就業率が上がっていることがあげられます。岩見沢市の女性の就業率を年齢別に見ると、平成２年あるいは平成７年の時点では 30 代の女性を中心に見られた就業率の落ち込み、いわゆる「M 字カーブ」が平成 12 年ごろからは解消に向かい、近年、平成 22 年時点ではもはやM字カーブとは言い切れない状況になっていることが判ります。



０～５歳児の推計（岩見沢市）



女性の就業率の推移（岩見沢市）

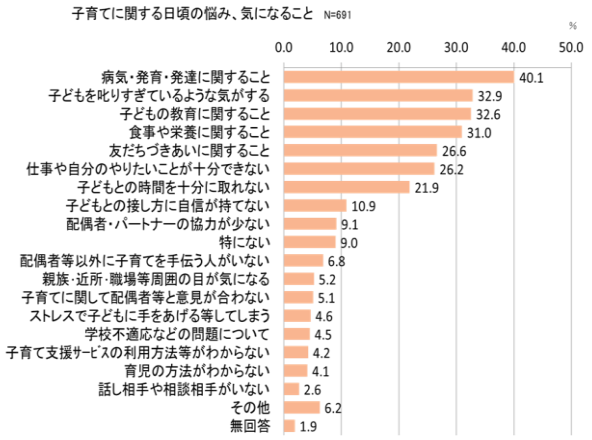
女性の就業率の増加が、０歳児から２歳児の保育園の利用を促している、と推測できる状況になっていると考えられます。

保護者の意見とプランの基本理念

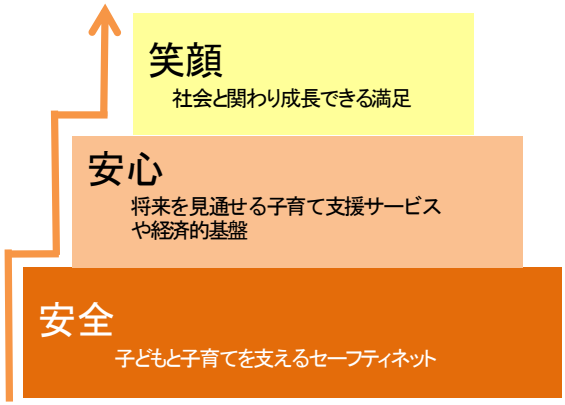
次に、昨年 12 月に就学前児童の保護者と小学生の保護者を対象に行ったニーズ調査から、就学前児童の保護者の皆さんのご意見をグラフにまとめています。

保護者の日ごろの悩みは、子どもの発達や教育に関すること、また、市への要望としては、経済的な支援や医療・保育サービスなどが上がっています。こうした保護者の悩みや市に対する要望事項にどのように答えていくのかが計画策定の鍵になります。

次に、プランの基本理念です。「人の絆で紡ぐ笑顔の輪」と表現しています。子どもの笑顔は健やかな成長の証です。そのことを目標に、子どもを育てていく保護者や地域の人、あるいは大きな子が小さな子の面倒



子育てに関する日頃の悩み（就学前児童をもつ保護者）



子育て支援の３つの視点

をみるなど、支える人と支えられる人が、互いに満足感を得ることができる、ということを表現したものです。

さらに、子育て支援のさまざまな取り組みを「安全」「安心」「笑顔」の３つの視点に分けて、実施していこうと考えています。

「安全」は、子どもと保護者と命と健康を守るということで、安全が保障される支援が受けられる環境をつくることが基礎になると考えています。

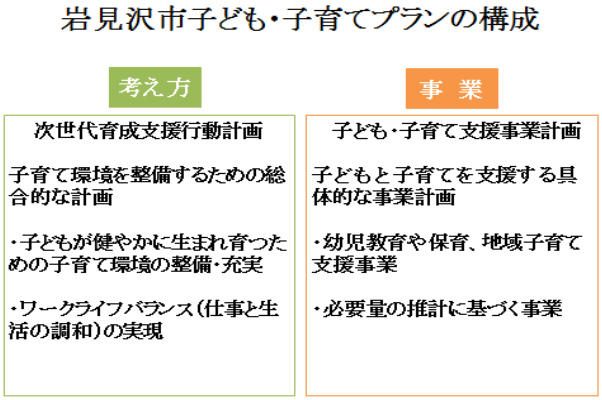
「安心」は、保育園の利用など、安心して子育てができるサービスを受けられるといった、将来を見通せる多様なサービスの提供と考えています。

「笑顔」は、子育てを楽しいと感じ、希望を持つことができる、その結果、支援を受ける人や支援者が、またあるときは支援を受けるものと提供するものとの立場が逆転するように、関係者が絆でつながれることを、笑顔と言う言葉で表現しています。

子ども・子育てプランの骨格と優先する取り組み

子ども・子育てプランは、次世代育成支援対策法にもとづく『次世代育成支援行動計画』、それと子ども・子育て支援法にもとづく『子ども・子育て支援事業計画』の２本の柱で構成しています。

『次世代育成支援行動計画』では、子育て支援の考え方を、『子ども・子育て支援事業計画』では、それらを実行する様々な事業を盛り込む構成としています。また支援事業計画では、保育や幼児教育をはじめ主な子育て支援事業のニーズ量の見込み数と、それらの確保策を掲載します。



岩見沢市子ども・子育てプランの構成

優先する施策の考え方ですが、「安全」に分類した事業から最優先に取り組むこととし、新規事業として、病児・病後児保育、ショートステイ、ファミリーサポートなどを予定しています。

今後５年間の計画期間内に、新たに取り組む事業や拡充を目指すような事業は、病児・病後児保育、ショートステイ、ファミリーサポート、それから栗沢地域における保育園と幼稚園との一元化を目指した環境の整備、であえーる岩見沢に予定する屋内型の遊び場の整備、そして利用時間の延長などに対応した放課後児童クラブの対策などです。

認定こども園の量の見込みと確保策

次に、各種事業の量の見込みと確保策についてです。新制度の『１号認定』に分類されるのが、幼稚園及び認定こども園の利用児童です。現在認定こども園は市内にありませんので、幼稚園に該当するニーズの推定

値になります。

今年５月１日現在の学校基本調査に基づき、北海道が集計している市内幼稚園の定員は、1,065 名。一方、ニーズ量は、27 年から 31 年までの５年間で 917 人から 839 人と予想されています。

したがって平成 27 年当初から、定員の枠内にニーズが収まっております。なお表の中に記載している特定教育・保育施設とは、栗沢にある定員 70 名の市立すみれ幼稚園で、そのほかは市内で各学校法人が経営します幼稚園の定員、合わせて 995 人です。（追記：市立すみれ幼稚園は、平成 29 年度から幼稚園部分 15 名の認定こども園に移行する予定としています。）

現在のところ市内の各幼稚園は新制度に移行する予定が無いため、新制度の中では確認を受けない幼稚園として分類しています。

幼稚園及び認定こども園の量の見込みと確保策

【現状】

対象施設	定員（人）
認定こども園1号枠	0
幼稚園	1,065
計	1,065

【ニーズと確保策】 （単位：人）

		H27	H28	H29	H30	H31
①利用ニーズ		917	890	869	839	839
②確保策	特定教育・保育施設	70	70	15	15	15
	確認を受けない幼稚園	995	995	995	995	995
	計	1,065	1,065	1,010	1,010	1,010
③不足数 （①－②）		0	0	0	0	0

保育園の量の見込みと確保策

次に『２号認定』に分類される３歳から５歳で保育園の利用を希望する児童数です。平成 27 年度から 31 年度までは 757 人から 693 人と予想されています。27 年度当初から、市内の認可保育園全体と北村・上幌向・栗沢に設置している「へき地保育所」の定員の範囲内に収まっています。（追記：平成 29 年度から、栗沢地域に３歳以上の保育定員 30 名の認定こども園の設置を予定しています。）

次に『３号認定』、３歳未満の保育園です。現在認定こども園はないため、定員についてはゼロとしています。認可保育園の定員は 470 人、へき地保育所等の定員が 116 人です。

０歳児の利用ニーズに注目すると、０歳児については、１年以上育児休業を取得する予定の方や、公的保育以外のサービスの利用を予定する方を差し引いても、平成27年度では109人と比較的大きなニーズ量となっています。

それに対する確保策ですが、27 年度では 109 人のニーズに対し、96 人（認可保育園の公立と私立を合わせた 14 園における過去３年間の０歳児の受け入れ人数の最高値）になります。不足数として 27 年で 13 人、28 年で９人、29 年で３人と、３年間は充足できない状況が予想されています。これらの確保策として、計画案では平成 28 年、29 年と２名ずつ確保し、なんとか 30 年度には、０歳児のニーズを満たしていきたいと考えております。（追記：平成 29 年度に栗沢地域に設置予定の認定こども園により、０歳児３名を受入が可能になれば平成 29 年度の不足数が解消される見通しです。）

３歳以上、保育園の量の見込みと確保策

【現状】

対象施設	定員（人）
認定こども園2号枠	0
認可保育所	550
へき地保育所等	249
計	799

【ニーズと確保策】 （単位：人）

		H27	H28	H29	H30	H31
①利用ニーズ		757	735	717	693	693
②確保策	認定こども園	－	－	30	30	30
	認可保育所	550	550	550	550	550
	へき地保育所等	249	249	213	213	213
	計	799	799	793	793	793
③不足数 （①－②）		0	0	0	0	0

３歳未満、保育園の量の見込みと確保策

【現状】

対象施設	定員（人）
認定こども園3号枠	0
認可保育所	470
へき地保育所等	116
計	586

【ニーズと確保策　0歳児】 （単位：人）

		H27	H28	H29	H30	H31
①利用ニーズ		109	107	103	100	97
②確保策	認定こども園	－	－	3	3	3
	認可保育所	96	98	100	100	100
	へき地保育所等	0	0	0	0	0
	計	96	98	103	103	103
③不足数 （①－②）		13	9	0	0	0

【ニーズと確保策　1・2歳児】 （単位：人）

		H27	H28	H29	H30	H31
①利用ニーズ		425	431	420	408	396
②確保策	認定こども園	－	－	12	12	12
	認可保育所	374	372	370	370	370
	へき地保育所等	116	116	92	92	92
	計	490	488	474	474	474
③不足数 （①－②）		0	0	0	0	0

１・２歳児の利用ニーズに対する確保策につきましては、認可保育園 14 園と、へき地保育所等で受け入れが可能な定員があり、充足しています。

時間外保育事業の量の見込みと確保策

認可保育園における時間外保育事業・延長保育に関するニーズです。保育園の入園者のうち、保護者の就労時間などに通常保育で対応しきれない利用者を支援するもので、昨年の実績では１日当たり 43 名にとどまっていますが、ニーズ調査の結果では、平成 27 年度で 689 人、平成 31 年度でも 631 人と大きな差があります。しかし、認可保育園 13 園の定員が 930 人ですから、１日あたりの最大利用数が定員となりますので、各年度ともニーズが、膨らんだとしても充足できると考えています。

時間外保育事業の量の見込みと確保策

【現状】　（単位：箇所、人）

実施箇所数	13
利用者数（日・実）	43
充足状況	余裕

【ニーズと確保策】　（単位：箇所、人）

		H27	H28	H29	H30	H31
①利用ニーズ		698	679	660	640	631
確保策	実施箇所数	13	13	14	14	14
	② 利用可能数（日・実）	930	930	975	975	975
③不足数　（①－②）		0	0	0	0	0

一時預かり事業の量の見込みと確保策

次に、保育園における一時預かり事業です。一時預かりは、冠婚葬祭などで一時的に保育園を必要とする児童を対象に、1 日単位で利用でき、現在、公立一園、私立一園で実施しています。昨年の実績は、年間延べ利用者数で 412 人ですが、ニーズ量を推計すると、平成 27 年度で 7,980 人、31 年度でも 7,305 人に膨らんでいます。

一時預かり事業についても、現在の実施体制が続くとすれば年間 7,800 人まで利用可能であり、平成 27 年、28 年では 180 人から 139 人の不足が生じていますが、平成 29 年以降は解消すると考えています。

ショートスティの量の見込みと確保策

次に、児童養護施設などで実施する宿泊を伴う一時預かり、ショートステイです。こちらは、現在まだ事業を実施していませんが、ニーズ調査の結果、利用したいと回答されている方が年間の延べ数として 27 年で 40 人、28 年で 39 人、31 年で 37 人となっています。

ショートスティについては、次年度から、市内の児童養護施設「光が丘学園」への委託を検討しており、利用可能数としてはニーズ量と同量を見込んでいます。

保育園の一時預かり事業の量の見込みと確保策

【現状】　（単位：箇所、人）

実施箇所数	2
利用者数（年・延）	412
充足状況	充足

【ニーズと確保策】　（単位：箇所、人）

		H27	H28	H29	H30	H31
①利用ニーズ（年・延）		7,980	7,939	7,728	7,501	7,305
確保策	実施箇所数	2	2	2	2	2
	② 利用可能数（年・延）	7,800	7,800	7,800	7,800	7,800
③不足数　（①－②）		180	139	0	0	0

ショートスティの量の見込みと確保策

【現状】　（単位：箇所、人）

実施箇所数	無
利用者数（年・延）	
充足状況	不足

【ニーズと確保策】　（単位：箇所、人）

		H27	H28	H29	H30	H31
①利用ニーズ（年・延）		40	39	38	37	37
確保策	実施箇所数（予定）	1	1	1	1	1
	② 利用可能数（年・延）	40	39	38	37	37
③不足数　（①－②）		0	0	0	0	0

病児・病後児保育事業の量の見込みと確保策

次に病児・病後児保育事業です。病児・病後児保育は、お子さんが体調を崩しても保護者が仕事を休めないとき、あるいは保護者も一緒に体調を崩してしまったときに、専任の看護師や保育士を配置した保育室でお子さんをお預かりする事業です。

岩見沢市では平成 27 年度から新たに病児保育･病後児保育をそれぞれ一か所ずつ開設する予定です。ニーズ調査からニーズ量を推定すると、27 年度で 1,885 人、31 年度で 1,724 人となります。これに対して、27 年度当初から開設予定の二つの施設の受入可能数が 1,794 人であり、27 年度から 28 年度までは不足しますが、30 年以降は充足する見込みです。

病児・病後児保育事業の量の見込みと確保策

【現状】　（単位：箇所、人）

実施箇所数	無
利用者数（年・延）	
充足状況	不足

【ニーズと確保策】　（単位：箇所、人）

		H27	H28	H29	H30	H31
①利用ニーズ（年・延）		1,885	1,856	1,808	1,751	1,724
確保策	実施箇所数（予定）	2	2	2	2	2
	②　利用可能数（年・延）	1,794	1,794	1,794	1,794	1,794
③不足数　（①－②）		91	62	14	0	0

ファミリーサポートセンター事業の量の見込みと確保策

次は、ファミリーサポートセンター事業です。育児の手助けをしたい人と、育児の手助けが必要な人とが会員になり、助け合うもので、現在、民間の団体が事業を実施しています。

これについてもニーズ調査の結果、利用したいと回答している方が、１カ月あたりの延べ数で 27 年が 49 人、28 年が 47 人、31 年が 45 人となっています。

市としては、27 年から育児の手助けをしたい方に育成を行う講習会を開催し、会員の増強をはかり、30 年ごろには補助対象となるサービス会員数 50 人を目指していきます。その達成をめざした上で、公的資金を使い、ニーズに応えていきたいと考えています。

ファミリーサポートセンターの量の見込みと確保策

【現状】　（単位：箇所、人）

実施箇所数	無
利用者数（月・延）	
充足状況	不足

【ニーズと確保策】　（単位：箇所、人）

		H27	H28	H29	H30	H31
①利用ニーズ（年・延）		49	47	47	46	45
確保策	実施箇所数	0	0	0	1	1
	②　利用可能数（年・延）	0	0	0	50	50
③不足数　（①－②）		49	47	47	0	0

放課後児童健全育成事業の量の見込みと確保策

最後に、放課後児童健全育成事業、留守家庭児童が利用する放課後クラブです。現在、民間・公設合わせて 17 箇所で実施し、1 日あたりの利用者数は 397 人です。

ニーズ調査の結果では、平成 27 年では低学年 503 人、高学年 241 人、合わせて 744 人、31 年には低学年 463 人、高学年 222 人、合わせて 685 人のニーズを予想しています。現在１日あたりの平均利用人数は 397 人ですが、公設・民間含め、1,082 人の受け入れが可能です。

しかし、次年度から低学年と高学年を含めての適正な定員児童を増やすことになれば、27 年から９年にかけては高学年の児童に不足がでます。これについては、小学校の余裕教室の活用などにより、30 年から高学年の受け入れが可能になれば不足が解消すると考えております。

放課後児童健全育成事業の量の見込みと確保策

【現状】　（単位：箇所、人）

実施箇所数	17
利用者数（日・実）	397
充足状況	充足

【ニーズと確保策】　（単位：箇所、人）

		H27	H28	H29	H30	H31
①利用ニーズ（全学年）		744	720	711	706	685
	Ａうち低学年	503	484	478	476	463
	Ｂうち高学年	241	236	233	230	222
確保策	実施箇所数	17	17	17	17	20
	Ｃ低学年利用可能数（日・実）	503	484	478	476	463
	Ｄ高学年利用可能数（日・実）	0	0	0	230	222
②不足数（全学年）		241	236	233	0	0
	Ｅうち低学年（Ａ－Ｃ）	0	0	0	0	0
	Ｆうち高学年（Ｂ－Ｄ）	241	236	233	0	0

以上が、岩見沢市が予定する子ども・子育て新制度にもとづくプランの概要です。ただいまご説明したように、岩見沢市の考えとしては、０歳児から２歳児の保育、そのほかにショートステイ、病児・病後児、ファミリーサポートセンター事業など、安全・安心の観点から、支援策を充実することにより、子育てがしやすい環境を整えていきたいと考えております。

第２部　基調講演

子どものこころの成長と子育て支援

平野直己（北海道教育大学札幌校臨床心理学研究室）

平野直己さん
（北海道教育大学）

みなさんこんにちは。平野と申します。所属は北海道教育大学札幌校ですが、僕はもともと岩見沢校の教員をしていました。そして、この岩見沢で子育てもしました。今回、お時間いただいて、市からご説明があったことを、もう少し砕けた言葉でお話していこうと思っています。

先ほどの市からの説明で、ちょっと驚いたのですが、これから 10 年で、子どもが減るということです。これかなり深刻な状況で、この調子で何十年もしたら子どもがゼロになってしまうのかと心配です。

実際には、そんなことにはならないと思いますけれど、子どもたちが絶滅危惧種になるかも知れないということです。子どもを見たら、みんなびっくりして写真を撮らなきゃいけないのかと考えてしまいます。そんな世の中にはしたくないですが、全国的に今そういう状況が起こっているということです。それに対して僕たちは、どんなことが出来るかということです。

もう一つこれは、僕の個人的な考えですけれども、市としてじゃなく、いま国がどう言っているかというと、もう一方では税金が足りなくて、人手も足りないので、女性にひとりでも多く働いてもらいたいと言っています。ワークライフバランスと言う考え方の背景にありそうなことは、出来るだけ早く子どもたちを専門家に預けて、どうぞお母さんたち働きに出てください、そして税金を払って下さい、という国としての戦略です。

だから本当は子育てをじっくりやりたいけども、働かざるを得ないっていう人たちが、どうやって安心して子どもたちとじっくり時間を過ごせるかっていう背景をつくることは、これから僕たちが考えていかなきゃいけないという状況です。一応、国の行動計画にはそういうことがありますが、僕たちは一体どういう方向で少しでも岩見沢市にとっていい政策や環境づくりを考えて行くことができるかが大切だと思います。

子どもが社会の真ん中に

さて、ここからは、岩見沢市子ども・子育て会議を代表し、私たちが今回のプランに込めた思いをお伝えしたいと思っています。

とりわけ、今回、委員の中で話し合ったことは、人と人とが笑顔で向かい合って交流する地域づくりを考えようということでした。これは、皆さんも望むところだと思います。みんな悲しい顔をしながら地域づくりはしたくないですよね。できることならみすべての市民が穏やかな表情で、楽しく生活をしてきたい。そのときに、子どもというのは、僕たちに笑顔を生み出してくれる大事な存在だと思っています。

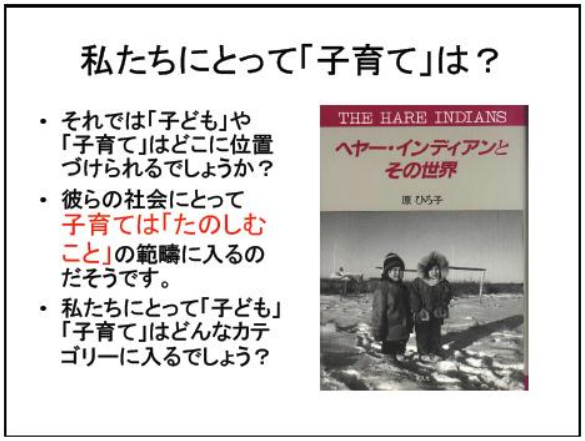
つまり子どもが社会の真ん中にいると、何となくみんなの顔がほぐれてくる。子どもが真ん中にいることがとても大事だということが、今回の私たち、子ども・子育て会議の話し合いの中の大きなテーマとなりました。その意義について、僕の専門である、臨床心理学の立場からご紹介していきたいと思います。

僕は、岩見沢のある住宅街に一軒家を借りて、フリースペース・ユリーカという場所を主宰していました。そこには昼間学校に行きたくても、なかなか行くことに心配や不安を抱いている子どもたち、不登校と言われたりしていますが、そういう子どもたちとその家族が多く通ってきてくれました。そこでの経験に基づいて、地域づくりのヒントとなるようなことってどんなことかっていうのを、少し提案し、話を終えたいと思っております。

ヘヤー・インディアンと子育て

まず、僕の大好きな『子どもの文化人類学』という本を紹介します。著者は、原ひろ子さんという文化人類学者です。文化人類学は、どういう学問かというと、異なる文化を営むところに行ってみる。そうすると、自分が暮らす文化とは考え方の違いに気がつきます。違うことがいいとか悪いという話じゃなくて、どちらも決まったものと考えた上で、異なる文化から学ぶことは何なのかっていうことを考える学問です。

著者は自身が母親でもあることから、子育てに関わる文化の違いを研究されていました。その研究の対象となったのはカナダの原住民ヘヤー・インディアンで、



原ひろ子「ヘヤー・インディアンとその世界」

このヘヤー・インディアンの人たちの中では、自分たちの日常生活は大きく３つの概念にわけられているのだそうです。

その一つは何かというと、働くこと。もう一つは、楽しむことです。３つめは、休むことだそうです。それでは、ここで問題です。子育てはこの３つのカテゴリの中のどれに入るでしょうか。

ヘヤー・インディアンの社会にとって、子育てとは楽しむことのカテゴリに入るというのです。もちろんインターネットもなく、テレビも無かったでしょうから、余暇活動も少ないと思います。けれども、子どもというのは、大人の人たちを笑顔にしてくれる、楽しませてくれる存在だということです。

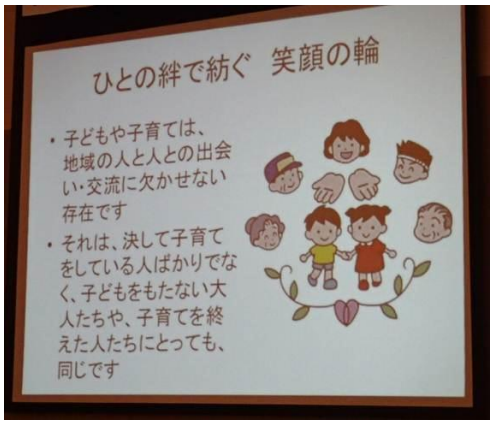
ヘヤー･インディアンの子育てのあり方は面白くて、親と子の結びつきはそんなに強くないのだそうです。子どもが親との暮らしをあまり好きじゃなかったら、隣の家にいって暮らすのもオーケーだそうです。地域の中で､みんなで子育てをすることを教えてくれます。ともかく、彼らの社会にとっては、子育ては楽しむカテゴリに入るのです。

僕たちにとって、子どもとか子育てというのは、実際のところどんなカテゴリに入るのでしょうか。働くことでしょうか？あるいは苦痛とかでしょうか？お金がかかるでしょうか。いろんなカテゴリが想像されますが、少なくともヘヤー・インディアンにとっては楽しみなのであって、僕たちも出来ることなら、楽しむというカテゴリの中に子育てを入れていきたいと思います。

子どもは大人をつなぐ外交官

子ども・子育て会議の中で、岩見沢市の子育てに関する取り組みを表わすキャッチフレーズをつけようということで決まったのが、「ひとの絆で紡ぐ笑顔の輪」です。

先ほども言いましたが､子どもや子育てというのは、地域の人と人との出会いや交流に欠かせない存在です。例えば､僕は東京から岩見沢に引っ越してきましたが、知り合いのいない土地で、子どもたちがいてくれて本当に助かりました。子どもたちは大人同士をつないでくれる外交官になってくれたのです。小さな子どもがいると、周りの人たちが声をかけてくださって、それを通じて知り合いになるとか、あるいは幼稚園や保育園とか小学校、中学校などに子どもが通うことで、大人同士が知り合いになるのです。たぶんそれがなかったら僕たちは岩見沢にそれほど愛着を持てないまま、もしかしたら出て行かなければならなかったかもしれません。子どもがいてくれたおかげで、色々な方と出会い、付き合うことができたのです。



“ひとの絆で紡ぐ笑顔の輪”
岩見沢市子ども・子育てプランの基本理念

もちろんこうした交流は、子育てをしている方だけではないと思うのです｡例えば､お店をやっている方々にとっても、子どもがいてくれることはとても大切なことかもしれないし、子育てしなきゃいけない世代だけでなくて、子どもをもたない大人の人たち、子育てを終えた人たちにとっても、子どもというのは大事な存在であるということです。子どもたちを通じて、人との関係を育てることになるのです。

乳児期の子ども

もちろん子育てと言っても、子どもに対してずっと一つのことをすればいいのではありません。

“発達”の時期に応じた、子どもたちの支援の仕方を考えてみましょう。

まず乳児期というのは、赤ちゃんが一人では生きていけない時期です。

赤ちゃんは生まれたときに、「えーん」と泣くのはどうしてでしょうか。赤ちゃんは自力で自分の空腹を満たすことができないのです。だから赤ちゃんは「えーん」と泣くことによって、大人に近づいて来てもらうようになっていて、そこで大人から栄養をもらって、生命を維持していくのです。赤ちゃんは身体的にも心理的にも、社会の人たちから受け入れられないと生きていけない存在なのです。

だから、僕らが考える乳児期への子育て支援というのは、赤ちゃんが身体的にも心理的にも守られている、安全であることがとても重要だということです。

乳児期には「安全」ということがとても大事で、岩見沢市としては、ここをしっかり支え合いたいと言っているのは、まず命や心を守るということが基本になると考えるからです。

そのためには親子関係を支えるということが大事になります。命や心を守る、体を守ってくれる存在、その一番身近にいるのは親になりますから、親子関係を社会で支えていくことが非常に大事になってきます。

イギリスの小児科医で精神分析家でもあるウィニコットは「ただ一人の赤ちゃんなんてこの世には存在しない。いるのは赤ちゃんとお母さんだ」と述べたそうです。ここでお母さんというのは、母親じゃないと子育てできないのではありません。子どもの身近にいる大人ということもできるでしょう。大人が元気になれる、笑顔になれるような支援をしないことには、子どもの支援はあり得ないという考え方になります。

幼児期の子ども

もう少し大きくなると幼児期になります。幼児期になると自分から歩いて動き出す頃です。この時期に必要なことは何かというと、五感をめいっぱい使って、この世界を楽しむことです。ところが、ともすれば脳みそのある一部だけを活性化させることが大事であるかのような教育も多く存在するのが現状です。

運動をすることも、音楽を聴くことも、いろんなものに触ってみることもそれぞれ大事で、においを嗅ぐことも大事です。こういう五感をとおして世界を探求する、探索するっていうことを支援したいのです。その一番いいツールは何かというと遊ぶことです。

子どもの権利条約をご存知の方も多いでしょう。国連・ユネスコが制定しているもので、日本も批准しています。しかし、この条約の中に子どもの遊ぶ権利があることは意外と知られていません。子どもには遊ぶ権利が保障されているのです。実は子どもの権利条約の中で、世界中で一番おろそかにされている条項といわれています。

自主性を育てるため、生活力を高めるため、昔の遊びを覚えさせるためとか、そうしたことではなくて、遊ぶこと自体が、子どもたちには（人間には）必須の活動なのです。

セミナー会場の様子

幼児期の子どもたちが遊ぶことを、どれだけ保障することができるかがとても重要になります。子どもたちがのびのび遊ぶと、大人たちはハラハラします。木登りで遊ぶ子どもを見守る大人を想像してみてください。もし大人が安心したいならば、子どもたちを動かさないことです。子どもたちを活動させなければ大人たちは安心していられます。

しかし、このドキドキする気持ちを、周りの人たちと一緒に支え合うことで、子どもたちが遊ぶことができます。それでは、どうやって遊ぶことを保障してあげられるのでしょう。

岩見沢市でも、そのことを考えてみようということ

になって、今度、室内で冬でも思い切り子どもたちが遊べるような場所をつくろうということになりました。

児童期の子ども

次は児童期です。児童期は親の愛情を心にとどめ、親から離れても学校に通うことができます。親が目の前にいなくても離れて過ごし学びます。もう一つは仲間づくりです。そこで大事なことの一つは、小さな悪いことをすること。例えば、小学生の男の子だけ、女の子だけでちょっとしたグループ、ギャングになって、冒険をすることです。

あるコメディアンは「赤信号みんなで渡れば怖くない」と言いました。仲間内で、あるときは妥協したり、またあるときは競争したり、けんかをしたりしながら、子どもたちは成長していくのです。

子どもが離れるとき、悪さをするとき、親はドキドキするわけです。子ども達がこんなことするからと嘆くかもしれませんが、でもそれは子どもらしいことです。この大人の不安をどうやって和らげるかというときに、大人の仲間関係が問われることになります。

思春期の子ども

次は思春期です。思春期は何かというと大人の身体になるということです。子どもが、いよいよ子どもから卒業する時期です。子どもたちにとっては、ちょっとややこしい時期になります。身体は大人になっても、まだ心は子どものままですから、大人になるにはどんなことが必要でしょうか。

大人になるためには、次に言う二つの公式を解く必要があります。一つは、大人の言いなりにならないということです。大人の言うとおりになっていたら、子どもは子どものままなのです。

もう１つは、大人の人たちから認めてもらえないと大人になれないのです。この二つの公式をどうやって解いたらいいのでしょうか。大人の言いなりにならずに大人に認められる。この大人が１人だったら、ややこしいことが起こります。

つまり、言うとおりにならない大人と、認めてくれる大人の二役がいたら、僕たちは子どもを大人にすることが出来るということです。

あるときは言いなりにならない大人がいて、チャレンジすることも認めてくれる大人もいるというこの二つに留意した子育てをしたいのです。これは決してひとりの親では、できないということです。

そういう意味では、子どもたちは、大人になるためにどういうことをし始めるかというと、親や教師に見えないところに行こうとします。皆さんも大人の見えないところで大人になったはずです。だから大人の僕たちが子どもに、大人の見えないところを作ってあげなきゃいけないのです。でもそれだけだと心配です。見えない場所に、見守ってくれる人たちがいてくれることが必要になるわけです。親や教師じゃないもう一人の人たちです。これが子どもの重要な子育ての役割を担います。

このように、発達の時期によって僕たち大人が、子どもたちに与えてあげるものを変えていかなければなりません。子育て支援においても一つのことで、すべてが完結するものじゃないということをここでお伝えしたかったのです。

出来なくなる変化と生涯発達心理学

もう一つ、少し話を変えようと思います。もう少し視野を広げてみて、僕たち大人のことを考えたいと思います。

かつて心理学では発達心理学という学問がありました。発達心理学とはどういう学問かというと、生まれてから大人に成長するまでの心理学でした。ある人は、これを右肩上がりの心理学といいました。つまり、色々なことができるようになっていく、一人前の大人になっていくまでのプロセスを描くのが発達心理学でした。

人生 60 年時代はそれで良かったのですが、いまや人生は80年時代、もしかしたら90年時代になりました。そうそう人は死ななくなったのです。そうすると今度は、右肩下がりの心理学も必要じゃないかということになりました。どうやって人生の最期に着地していくかというのも発達だと考えたのです。人は生まれてから死ぬまで、つまり子どもの成長によって、大人も成長していきます。僕も最近日々成長している感じがするのです。色々なことができなくなってくるわけです。できない変化というのも発達なのです。

こういう視点を持って、心の心理学だと「生涯発達心理学」という名前で今はライフスパン・ディベロッ

プメンタル・サイコロジーという感じですね。

このライフスパンという視点を持って、子育てを見ていくのはどういうことかというと、子育てをする側、あるいは大人側も、実は子どもたちと一緒に成長しているという視点から、見えてくることがあるわけです。

子どもの成長と循環する地域づくり

子どもなしには僕たちは成長できないという見方が出来てくるわけです。大人も子どもも発達し成長するという意味では対等なのです。つまり、子どもや子育てを通して私たちは、子どもに成長させてもらっているのです。そんなことないですか？

例えば赤ちゃんは、夜中勝手に泣くのです。僕たちの都合にあわせてはくれません。そんな時に僕は目を覚まして、赤ちゃんがおっぱいかなあ、おしりかなあ、それとも汗をかいているのかなということを考えるのです。一生懸命考えます、赤ちゃんは教えてくれないですからね。赤ちゃんに「お母さんご飯が欲しい」とて言ってくれたらどれだけ楽かと思いますよね。でも、そういうふうには教えてくれない訳です。

だからどうするかというと、まず背中が濡れてないかなって抱っこしながら、そのあとお尻のほうに手をやって、おもらししているかなあ、そうでもないかなと思って、やっぱりおっぱいだったりするのです。

僕には残念だけどおっぱいが出ないから、人工乳を持ってきたり、あるいは冷凍しているものをもう一回温め直したりして子どもにあげるわけです。

赤ちゃんがいっぱいお乳を吸ってくれて、それで寝ます。その健やかな子どもの笑顔を見て、お父さんやお母さんがどう思うかというと、自分のやっている子育てが報われた気持ちがします。つまり、僕たちも子どもから報酬をもらっているのです。

そうした中で親というのは、またもう一日がんばってみるかと、一日一日前進していくのです。このように僕たちが子どもにしてあげているだけじゃなくて、してあげていることから、返ってくることで僕たちもまた、育ててもらっているのです。このような視点がでてくると思うのです。

つまり、「循環」「円環」というのが必要なのです。交流もたぶんそうで、交流の中でも、地域の若者たちと出会って、関わることで、なにか生きている充実感をもらえるかもしれません。自分たちも日々、まだ成長していくという視点にたって、ぜひ地域を考えてもらいたいということになるわけです。

こういうように循環する社会、輪を描く地域づくりに、子育てというのはとても重要なツールになります。例えば、自立という意味合いは、少しずつ変わりつつあります。皆さんは自立といったらどういうときに使いますか。たぶん、誰にも頼らないという意味での自立、自分のことは自分でする、ひと様の迷惑にならない、これが自立という考え方です。

でも、これだけだと無理が生じやすく、高齢になってくると、できないことが増えてくるからです。これが成長、発達なのです。今度は何が必要になってくるかっていうと、助けてもらうということを通して、子どもたちに成長してもらう、あるいは助けを受けて自分たちも成長するということです。

子どもの笑顔とお互いさまの文化

そうなると、もう一つの視点が大事になります。それは「お互いさま」という自立のあり方です。つまり、みんなで支えあうことで、互いに成長できる、こういう自立の仕方もあると思います。

いま世界的にもこういう考え方が大事だって言われています。インターディペンデンスと言うのです。インターとは、人と人との間で、ディペンデンスは、依存する、頼るっていうことです。頼らないという自立はインディペンデンス、ディペンデントしないっていう意味です。

いま大事なのは、インターディペンデンス、お互いさまの文化をつくるということになると思います。だから子育てはお互いさまの自立です。誰かの笑顔が自分の笑顔になる、あるいは誰かの力になることで自分も成長させてもらえているのです。子育てはそういう世界をつくるのに、もってこいの場所だと言えると思うのです。

つまり子どもと関わって、子どもをサポートすることで、実は自分がサポートされているのです。あるいは、誰かの力になることで自分が成長することもそうですし、子どもたちの笑顔を見て、なんとなく自分たちも笑顔になります。こんなまちづくりを、岩見沢で出来たらいいなと僕たちは考えているわけです。

さて、子どもを真ん中にという、今回僕たちがお伝えしたかった意味というのが少しわかっていただけたでしょうか。

つまり、こういった視点が、私たちを笑顔にして、私たちを成長させて、そして街を豊かにするものだと思うのです。いつも子どもたちがいるところで、みんながにこにこと笑っている街にみなさん住みたいと思いませんか。

先ほどの統計を見ると、10 年後に 700 人子どもたちが減る、未就学の子どもたちが減るというのは、大変危機的な状況です。どこのまちも同じだとしたら、岩見沢市にいっぱい子どもたちを連れてこられないでしょうか。

岩見沢市に来たら、子どもはみんなにこにこ笑いながら、子どもたちを真ん中におきながら、子育てを楽しむカテゴリに入れながら、暮らしていく街だとしたら、ほかの近隣からも岩見沢市に住みたいなと思う人たちが増えてくるのではないでしょうか。こういう街になるための第一歩となるきっかけに、今回のプランがなってくれればいいなと思って、僕たちは一生懸命アイディアを出し合いました。では具体的にどんなことができるだろうかということです。

遊びと支援者の輪

いくつかのアイディアです。一つめは何かというと、支援者になることが支援になるということです。

冒険遊び場で、水遊びする子どもたち

このスライドはある街で開催された「冒険遊び場」という取り組みでの 1 枚です。実は、岩見沢市でも冒険遊び場の取り組みが始められているのです。冒険遊び場とは、できるだけ大人の制約なしに、子どもたちに遊んでもらう場所を、大人の人たちが提供しようという発想に基づいた活動です。たとえば、いま公園では穴を掘ることもだめだし、火を使ってもいけません。みんなで木の切れ端を持ち寄って、

冒険遊び場で、のこぎりを使う子どもたち

トンカチと釘を使って犬の小屋を作ったりするというような環境すらありません。木登りなんてさせてもらえません。だったら、大人の人たちがそういう場所を、ドキドキハラハラに耐えながら、子どもたちに提供しようじゃないかという取り組みが、冒険遊び場づくりです。

心が折れるくらいだったら、骨が折れたっていいじゃないかというのがその冒険遊び場のテーマです。そんなところで子どもたちが遊んでいる姿を、僕は関西のある街で見学してきたのです。この写真は水飲み場でちょっと大きいお姉ちゃんが、小さい子に使い方を教えているのです。この姿を見た大人は、その上のお姉ちゃんをきっと褒めてくれます。よくやったね、えらいねって。そうしたらその子はとっても元気になります。

つまり、支援する立場の人たちが元気になっちゃうのです。だとしたら、元気ない子どもに何を与えられたらいいかというと、支援者になれる環境かもしれません。だから元気ない人に元気になってもらうためには、世の中で役立つ人だということを、体験させてあげるっていうことだと思うわけです。

子どもたちを成長させたいならば、彼らに支援者であるっていう立場であることを実感させてあげて欲しいわけです。

もう一つのアイディアです。これはのこぎりを使って遊んでいるところで、この後、お前うるさいよ！とけんかが始まるかもしれません。手伝って手を出したら、手を出すな！ってけんかが始まるのです。これも面白いところです。

たとえば、お互いさまというところに立つと、こうやって輪になるのです。支援者になっているときは誰かを助け、助けてもらった人もまた支援者になって誰かを助けるのです。これもちろん子どもだけでなくてもいいと思うのです。中に大人が入ってもいいわけで

す。大人も助ける人ばかりじゃなくて、助けられる役もやってほしいわけです。

ナナメの関係と支援する人、受ける人

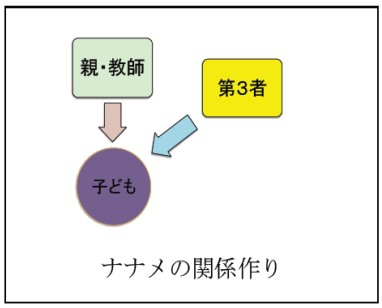
もうひとつのアイディアは、ナナメの関係を大切にしてほしいということです。ここに３人が写っていますけど、この３人の人たちは、血縁でもなんでもなくて、その場で知り合った仲間たちです。何故なのかわからないけど、３人でおしゃべりをしてげらげらしています。年代もみんなそれぞれ違います。

異なる年齢でつくる
ナナメの関係

ナナメの関係とはどういう関係でしょう。縦の関係とは、親子関係とか先生と生徒の関係とか言われるものです。横の関係は、友達同士っていう関係です。でも、縦の関係と横の関係だけじゃなくって、もうひとつ大事なのはナナメの関係だっていうことです。

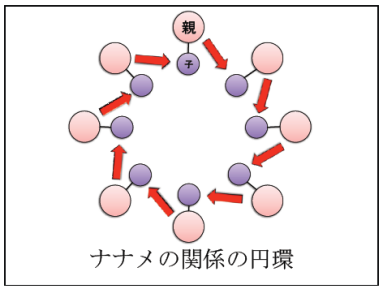
ナナメの関係とは、たとえば、自分の子どもに、何かいいことしようと思うと、過保護だって言われちゃうお母さんがいるとしましょう。過保護だって周りの人たちからしかられちゃう。だからどうするかと言うと、そのお母さんは、隣の子どもにしてあげるのです。すると隣の人から感謝されます。とっても優しいおばちゃんだって。

自分の子どもに勉強を教えると親子の間で血の雨が降るんです。いらいらしちゃいます。だけど、隣の子どもに教えると、その子どもは、素直に教わってくれるんですよ。これがナナメの関係です。だとしたら何をしたらいいかっていうと、親が自分の子どもに教えるんじゃなくって、隣の子どもに教えていくのです。それが輪になって、最後は自分の子どもを隣の大人の人が教えてくれるっていう社会です。そうすると誰もいらいらすることなく、子どもたちを育てることがしやすくなるのでしょうか。このような形で、ナナメの関係や、支援をする人が支援を受けている人だという関係がとても大切になるのです。



ナナメの関係作り

ナナメの関係
づくり



ナナメの関係の円環

ナナメの関係
がつくる円環

こういうような発想を持ちながら、まちづくりをしていくっていうのが、僕が地域実践心理学という形で実践しているもので、そこで見つけた皆さんに提案できるアイディアです。ぜひ皆さんも上手に支援を受ける側になって、時には支援をする側になりながら、子どもたちとともに、一緒に生きていけるような地域づくりに貢献していただければと思います。

僕の持ち時間はこれくらいだと思います。少しでも皆さんの笑顔や元気につながることになればいいなと思ってお話させてもらいました。ご清聴ありがとうございました。

平野直己さんのプロフィール

北海道教育大学札幌校臨床心理学研究室准教授。学校・地域研究支援センター（学校教育研究支援部門）も兼任。

主な研究内容は、児童期・思春期の心理援助、地域実践心理学（地域実践にかかわる心理臨床）、キャンプなどの野外体験活動における体験に関する研究、乳児と大人の表情を介したコミュニケーションの研究など。

様々な悩みを抱える子どもの支援にかかわり、フリースクールなどを通して不登校を含む幅広い教育支援活動を継続的に行っている。現在、札幌市ならびに岩見沢市の子ども・子育て会議委員も務める。

第３部　意見交換会

司　　会　所　美穂子（教育委員会子ども課）
パネラー
◆大野　和寛 氏　岩見沢市スポーツ推進委員。キッズスポーツ教室など、スポーツを通じて子どもたちの成長を支えている。
◇木下悠香梨 氏　岩見沢市子ども発達支援センター・つみき園作業療法士。子どもたちの発達支援はもとより、保護者のサポートも行う。
◆熊谷　雅之 氏　岩見沢緑陵高等学校教諭。生徒指導を担当する傍ら青少年問題協議会委員も務める。思春期にある高校生と日々向き合っている。
◇清野　浩子 氏　岩見沢市職員。親族が身近にいないため、保育所のほか友人とその家族の支援を受けながら３人の子育てと仕事を両立している。
◆増田美知雄 氏　あそび環境プロデューサー。子どものあそび環境づくりに携わる傍ら、岩見沢のバラを使った香水の開発も手掛ける。小学生のお孫さんの「孫育て」を楽しんでいる。

司会　これより５名のパネラーの皆さんによる意見交換会を始めます。私は進行を担当する教育委員会子ども課の所と申します。また、先ほど、お話をいただきました平野さんにも一緒にお聴きいただきたいと思います。

今日は、子どもと子育てに様々な形で関わっている５名の皆さんに、それぞれのお立場からお話をうかがい、今日のテーマ、子どもの成長と子育て支援について会場の皆さんと一緒に考えていきたいと思います。

親族の手助けに頼らない子育て

清野浩子さん
（岩見沢市職員）

清野　皆さんこんにちは。私は普段、岩見沢市の市民連携室というところで、市民の皆様からの相談や、交通安全や防犯対策などといった事務を行っております。本日はどうぞよろしくお願いいたします。

このような仕事をしている私がなぜここに座っているかと申しますと、実は私、３人の女の子を育てながら、仕事と家庭とを両立させていて、しかも地元が岩見沢ではないため、親族の手助けをすぐには借りることができないという状況で子育てをしています。そういう声を皆さんに届けてほしいと教育委員会からお話があり、今日のこの場に出させていただきました。

先ほど平野先生が、教育大の岩見沢校というお話をされましたが、私も北海道教育大学の岩見沢校、まだ小学校教員養成の課程があったときに通っていました。卒業後、平成 11 年に岩見沢市役所に採用になり、当時の女性青少年課、子育て支援に関する係をスタートに、税務課市民税係、会計室、介護保険係などを経て、今は市民相談のお仕事をさせていただいています。

かれこれ 15～16 年、市の職員として勤めており、その間、縁あって結婚することになり、今は小学校３年生を頭に、５歳と３歳の全部女の子３人を育て、普段は小学校に長女が通い、２番目と３番目は自宅の隣にある保育園にお世話になり、子育てをしながら、仕事をしているという毎日を過ごしております。

子どもが病気になったりしたとき、実家が家の近くにあると、お婆ちゃん、お爺ちゃんにお願いできると思うのですが、あいにく私自身の実家は札幌にあり、夫の実家も同じく札幌にあります。私自身はというと、仕事を始めてすぐに、母がクモ膜下出血で倒れ、そのあと長い療養期間を経て、一昨年に亡くなってしまったものですから、親族の手助けを借りることができない状況にありながら、子育てを現在しております。

残業のような手助けが必要になる場合は、友人のご家庭の方が、いつでも言ってちょうだい、と預かっていただく状況にあり、そちらのご家族の手助けを借りながら、毎日過ごしています。

スポーツを通した子育て支援

大野和寛さん
（岩見沢市スポーツ推進委員）

大野　皆さんこんにちは。私は教育委員会のスポーツ推進委員という職務で 12～13 年、務めさせていただいております。

４年前、子どもたちの体力が落ちている。しかも、この北海道の子どもたちが

全国で一番体力が落ちているというニュースが、新聞紙上やテレビをにぎわしました。その後、北海道体育協会から体力向上についていろいろな講習会があって、岩見沢市も子どもの体力向上に注目しはじめました。そこで、スポーツ教室を月に１回開催できないだろうかという話があり、子どもたちのスポーツ教室、キッズスポーツ教室が始まりました。

キッズスポーツは、月に１回、土曜日に開催しています。全市の１年生から３年生までの子どもたちが対象で、だいたい100名くらいの人数になります。

１年生から３年生の子どもたちというのは、運動面でいうと、プレゴールデンエイジといわれ、運動神経の発達段階としては、神経的な運動をすると良いと考えられる年齢です。

走ったりすることだけじゃなく、平衡感覚や俊敏性ですとか、体を動かす運動を取り入れたものを、毎月いろいろと企画しています。たとえば、平行棒を渡らせるとか、簡単なこととでは鬼ごっことか、ケンパとか、おはじきとか、そういうように手の運動だとか、頭の脳の働きを促すための運動をやっています。

毎月１回ですが、この年代の子どもたちというのはすごく飽き性です。２～３分やったらもう飽きちゃって、だらだらしてしまいます。この２～３分の間が勝負なものですから、運動場を４箇所に分けて、ここの場所はケンパをおきますよ、こちらは跳び箱をやりますよ、こちらは平行棒をやりますよ、というふうに４ヵ所に違った種目の運動を用意し、だいたい25名ずつに分けて、２回、３回とまわして行きます。

４ヵ所に分けてどんどん違う種目をやらせ、子どもたちの集中力をとにかく切らさないような形で、運動させています。来年も、毎月いろいろなことを私たちで考えていきます。子どもたちは、ちゃんとボールを受け取ったり、風船を飛ばしたり、サッカーボールを放ったり、上に上げたりとか、そういうことをやっています。

いま子どもたちに不足しているもの、それは、昔遊びなど、近所のお兄さん、お姉さんたちと一緒に遊ぶことです。今の子どもたちは、ほんとうに昔遊びを全然知りません。昔遊びは１年生から３年生までのプレゴールデンエイジの運動に関って、とても重要なことなんです。

ですから難しい言葉ではなく、ただ打って、受けてというような指の神経を発達させる、そういうものを鍛えるという形をとっています。これで、僕ら４年目を迎えましたが、内容的にはいろいろと新しい種目も取り入れています。

例えば、今年、教育大学でバルシューレというドイツの専門学校、大学で研究されたものを、大学の先生と一緒に、年間一回、このキッズスポーツに取り入れてやっております。

バルシューレというのは要するにボール遊びです。ドイツではバスケットやサッカーが強かったんですが、一時期サッカーも低迷しました。それで小さいときからの運動が大切ではないかということになり、改めて、大学で研究されて、子どもたちが指導をうけています。

その結果、サッカーが世界一になりました。それはまさしく子どもの頃から発達した子が、育成した子が上がってきたという実例です。それで、キッズスポーツにもバルシューレを取り入れてみました。これから色々みなさんとお話していきたいと思います。よろしくお願いいたします。

発達の心配や偏りと子育て支援

木下悠香梨さん
（岩見沢市こども発達支援センター・つみき園）

木下　こんにちは。こんなにたくさんの大人の中でお話しすることがあまりないので、すごく緊張しています。聞きづらかったらごめんなさい。子ども発達支援センター・つみき園の木下と申します。つみき園という場所は、何か子どもさんの発達に遅れがある、心配がある、偏りがあるといった方たちに、直接の指導を提供したり、また相談をうける場所になっています。

私は、作業療法士という資格で仕事をさせていただいています。作業療法と聞くとあまりなじみがないかと思うのですが、リハビリの職種のひとつで、運動訓練、運動機能訓練という一般的なリハビリの中から、より生活に身近な技術を習得することを仕事としています。それに加えて、生活環境を調整するということにも携わっている職種です。一般の方にはあまりなじ

みはないですよね。

つみき園には、たくさんの子どもたちが通ってきているのですが、つみき園が、特別な配慮が必要なお子さんに、特別なことをしてあげる場所であり続けるのではなく、その子どもさんが出来ることを、ひとつでも増やしてあげる、あとはそれを生活場面の中でどれくらい生かしていってあげられるという支援、「つなぎ」に力を注いでいきたいなと考えています。

先日、つみき園に作業療法学科の実習生が来ていたんですが、実習生に「営業マンみたいですね」って言われました。

つみき園という中でだけ、子どもを見るのではなく、保育所、幼稚園、学校、あとはご近所の地域と言われる場所に直接出向いていき、子どもたちとその場所をつなぐ仕事に携わっているっていうのが現状です。今日はよろしくお願いします。

思春期の子どもと子育て支援

熊谷雅之さん
（岩見沢緑陵高等学校教諭）

熊谷　こんにちは、岩見沢緑陵高校の熊谷と申します。岩見沢緑陵高校は、北海道教育大学岩見沢校の奥のほうにあるオレンジの建物です。普段、市民の皆さんと行き来するということが少ないものですから、緑陵高校を知っていただくために、学校案内のパンフレットを配布させていただきました。生徒の３年間の学校生活、笑顔が色々なところに散りばめられていて、楽しそうな学校じゃないかっていうイメージを持っていただけるのではないかと思います。実際にぎやかな、活気あふれる高校です。

私は教員になってから 20 年ほどたちます。5 校ほど高校を回っていますが、緑陵高校は非常に活気のある高校だと感じています。生徒数ですが、若干女子が多く、全体で 700 名程度の高校となっています。

生徒がこの学校案内のパンフレットのように、にぎやかな生活を送る中で、やはり 700 通りの悩みが、あるいはさまざまな心の動きがあるのかなと思います。

例えば、友人関係ですとか、学習に関わることだとか、家庭に関わること、非常に多様な状況があり、その一つ一つを私ども教員約 50 名で、毎日少しでも解決できるように、手だてを講じたり、あるいは生徒と話を夜遅くまでしたりしながら、解消に向けて、日々努力しております。

高校生というと思春期と言われる時期です。小学校の高学年５、６年生から高校生までの思春期の心はどのように形成されるのかというのを、図にしたものがあります。これは厚生労働省のホームページに出ているものですが、私どもがお預かりしている高校生については、色々な経験、あるいは色々な環境や影響で、自分の心をつくっていきながら「自分は自分、他人は他人」という、最終的にはいわゆる自我同一性を獲得できるかどうかという時期ですので、そこに携わっている者として、今日はその辺りを中心にお話させていただきます。

また私自身も、生徒指導部という部門をまとめる役職を担っています。生徒の生活面を主に指導していますので、今日は勉強をさせていただき、また明日以降それを日々生かしていければなと思いますので、今日はよろしくお願いします。

祖父母世代の子育て支援

増田美知雄さん
（あそび環境プロデューサー）

増田　皆さんこんにちは、増田と申します。こんな高い席から申し訳ございません。私は、ここにいる先生方のように、教育の勉強をしたこともございませんし、児童教育に直接たずさわった経験もないのですが、何故ここに呼ばれたのか私も席に着くまで、理解できなくて申し訳ございません。今朝６時におきて、神奈川県の逗子という遠くから来たということでご容赦いただきたいと思います。ご紹介の中にあそび環境プロデューサーという華々しいタイトルをつけていただいていますが、実はいろいろな事業に関わっています。

私は、民間放送会社が、こちらですと北海道放送も入っているのですけれども、共同で事業を立ち上げる部署に務めて十数年になり、その中のひとつで、ある

おもちゃ屋さんの立ち上げにも関わっています。主に北欧の玩具・遊具を35年ほど前に輸入したのですが、そのとき、国産の遊具と、向うの遊具では、安全基準とか、色とか、触感、肌触り、やはりものすごく進んでいるということを感じました。そういった遊具を導入し、全国に納めるということにも、直接間接に関った経験もございます。

先ほど、大野さんのお話にありましたように、子どもの体育能力が非常に落ちているというのがここ数年、何度か話題になっていますけれども、私も、子育てというか孫育てを通じてそのことを感じております。

それで15年ほど前に私の関連する会社が、輸入しているおもちゃの遊具とか玩具を使って、屋内で何とかできないかということを始めて、おかげさまで事業としては非常に成功し、今ではそれが全国に数十か所に広がりました。

正直、私も子育て中は、仕事オンリーで、ほとんど家内にまかせ、土日は、息子や娘となるべく密にやっていましたけれども、育てたという実感は本当になくて、今孫がもうすぐ４人目になるのですが、孫育ての段階になって、初めてまさに子育てを実感しています。

自分が作ってきた人工的な遊び場には、正直、孫を連れていったことがありません。いま住んでいるところが鎌倉の隣の逗子というところで、海も山もありますが、この岩見沢も自然が大変豊富なので、人工的なところにわざわざ行かなくても、海のそばへ行けば水遊びができますし、むしろそういう自然の中で遊んだほうがいいのかなと、私自身は思っております。

仕事としてやってきたのは、そういう人工的な場がないと子どもたちがどこに行っちゃうのだろうと言っている親のことを考えたものです。ところが、いざ始めてみると、有料で遊ばせる施設ですから、親御さんたちが何にもしないのです。インストラクターに子ども預けちゃって、自分たちはそっぽを向いています。

仕事としてやりながら、そういう状況が果たしてどんなものかなと、しょっちゅう疑問を持ちます。ただ、ここがないと、どこに行っちゃうのだろうっていう気持ちもあり、ずっと直接観察してきました。

そのほかにも、いま、博物館の中の展示室を、子どもが遊びながら、剥製や恐竜のレプリカを見ることができるように造るにはどうしたらいいかという相談をいただいていたり、大学の施設として、全国展開する育児施設をどうつくりあげていくかという相談を受けていたり、さまざまな企業の企業内保育のあり方をどうしたらいいかっていうようなお声がかりが多く、たいして役に立てませんけど、お話させていただいています。

今回、岩見沢市さんからお声がかかったのは、孫のことがあったからかと思います。自宅のすぐそばに娘が住んでいて、そこの長男が今小学校１年ですが、年長の時に空手を始め、私も一緒に習い始めました。先ほどの平野先生のご講演の中の生涯発達する考え方、まさに毎週発達しているというのを実感しています。

空手も、今は白帯なのですが、白帯には年長さんもいますので、還暦を過ぎた爺ちゃんと年長さんが、同じ格で空手をやっているという環境です。休憩時間になったら爺ちゃんがいるし、父ちゃんも母ちゃんもいるし、年長さんもいるし、これまさに、先ほど平野先生がおっしゃった、お互いさま、ナナメの関係です。

逗子市内の小さな世界ですけど、50人か10人くらいの中で、まさに世界が成り立っています。そういうことがみなさん望んでいることだろうということを改めて拝聴しながらうれしくも思っております。

子どもの心の成長を感じる場面

司会　５人の皆さん、それぞれに自己紹介で活動を紹介していただきました。それではさっそくテーマに合わせて進めていきたいと思います。

先ほど、平野さんから、発達、成長、ナナメの関係といったお話もありましたけれども、今日は子どもにスポットを当てて、子どもの心の成長ということを軸に考えていきたいと思います。はじめのテーマは、パネラーの皆さんそれぞれの生活や活動の中で、子どもの成長をどんな場面で感じるかということについて、お話いただきます。

３姉妹、それぞれの成長

清野　うちには子どもが３人います。小学校３年生、５歳、３歳と先ほど紹介させていただいたのですが、小学生の娘は好奇心旺盛で、何事にもチャレンジしたいというタイプ。「こどもチャレンジ」のCMが流れたら、小学校入学前からチャレンジをやりたいと言い、

英会話のCMが流れると、英会話をやりたい、NHK合唱コンクールのテレビをたまたま見たら、今度は合唱団をやりたい、保育園の行事の中でスイミングスクールに行って、教室を体験するという事があったのですが、そうするとプールも習いたいという具合です。

６年生まで続けるのですよ、と約束をしたうえで、習いたいといったものには、なるべくチャレンジさせています。その中のひとつには、先ほど大野さんがおっしゃったキッズスポーツもあり、今年はちょっと日程が合わなくて参加してないのですが、去年の２年生のときに参加して、ずいぶん楽しく過ごしたようです。

そういった習い事には発表会というものが付きものです。英会話でいけば、去年はお友達と２人で会話をやり取りするような発表をしたのですが、今年は自分で進んでコンテストを受けたいといい、一人で壇上に立って、「I'm big. I'm strong」というふうにスピーチを、身振り手振りしながら見事にこなしました。

そういった娘を見ると、成長しているんだなと実感します。親の付添いなしで、一人でレッスンに行って、先生に習ったことを身につけて、大勢の前で発表するといった度胸もついてというふうに、成長している姿を目で見て分かるような感じで体験しています。

また、下の子も上の子と同じ保育園に通っており、先日生活発表会がありました。一番下の子はかわいらしく、歌って踊り、真ん中の子は真ん中の子で、先ほど平野先生のお話の中で「子どもが子どもを支援する」というようなお話がありましたが、お友達のことをサポートしながらも、自分の発表をしているような姿を見ることもできました。

そういう光景を見ると、成長しているなと。思わず涙がウルウルっとするような場面で成長を感じることが多いです。

日常生活の中では、働いて帰ってきて、忙しくご飯食べさせて、お風呂に入れて、寝る準備して、寝かしつけるというように嵐のような毎日です。例えば、お風呂に入ることも、子どもがみんな小さいときは、私がご飯の後片付けも全部後回しにして、３人をお風呂に入れて、頭を洗って体を洗って、温めてというのを順々にやって、寝かしつけて、ようやく一息つくっていう状態でした。

さすがに一番上のお姉ちゃんは、小学校３年生で９歳にもなると、下の子二人を面倒見ながら入ってくれるようになりました。下の子のお世話ができるのも成長で、お母さん助かるわって思って毎日を過ごしています。

児童期のスポーツと団体活動

大野　私たちがやっているキッズスポーツ教室ですが、対象年齢は先ほどご紹介したように１年生から３年生まで、５月が第１回目のスタートです。

キッズの1回目の開催日は５月の10日前後ですので、１年生は、まだ学校で運動会を経験していません。1回目の１年生は、ぞろぞろ入ってきて、玄関で脱いだ靴もそのままにして、その後ろからお父さんがついてきて、靴を片付けて、子どもと受付に来るといった感じです。

キッズスポーツ教室とバルシューレ（2014 年）

受付で、お名前は？といっても全然しらんぷり、あっちこっちを見ながら、体育館に入っていくのですが、体育館に入っても、荷物をここにおいてと言われたらボーッとリュックを置いて、体育館でそれぞれ遊んでいます。

友だちの中に入って遊ぶような団体活動に全然馴染んでいないのです。幼稚園、保育園を卒園してまだ１カ月もたたないという段階ですが、団体行動やルールなど、そういうものが身についてない。子どもらしいと言えば子どもらしく、ほんとにのびのびとした状況で第１回の教室を迎えるのです。

ところが、５月末の運動会が終わったあと、６月のキッズスポーツになると、落ち着いて玄関に来て、下駄箱に靴をちゃんと持っていって、受付でも自分の名

前を言って、そしてまたリュックをちゃんと荷物置き場に置けるようになります。５月に会ったときの子と同じなのかなと思うくらいに成長しています。

私たち以上に成長しています。私たちが、どれだけ成長できるかなと考えてみると、やっぱり子どもっていうのは成長がすごく早いということがよくわかります。

そのように、１年生は運動会を境に大きく成長し、この１年で団体行動を身につけ、色々な運動をして、まわりの子どもたちと遊んでいます。

２年、３年生は、もう大人です。一年間キッズスポーツを経験し、落ち着いて、色々なことができ、次はこれをやるだろうとかそういうことも全部、感じとっていますので、とても落ち着いています。

下級生に対しても、思いやるというか、面倒を見て、「こういうふうにするのだよ」と教えたり、上級生らしくなってきます。

１年生だった子が２年生になって顔も大人びて、体もある程度大きくなりますし、１、２か月会わない間にずいぶん大人になるなということも感じます。また、２年生、３年生は先ほど、平野先生のお話にもあったように、ずるさっていうことも覚えてきます。

１年生はずるいことってあまり考えないのですが、２年３年になると、横の子どもたちにちょっかいを掛けたり、注意してもそ知らぬ顔で、大人が離れちゃうと、またそこでちょっかいをかけるなど、ずるさっていうのを、覚えてきます。

でも、子どもたちが、そういうずるさを覚えるのも成長だと思っています。

ゆっくりな成長

木下　私が関わっているお子さんは、ほんとうに発達がゆっくりであったり、言葉の発達がゆっくりであったり、得意なことと不得意なことの幅が大きいお子さんであったり、人と関わる、集団と関わるということに苦手さがあるお子さんたちが多くいます。

その中で出来ることは、実は、たくさんあるのですが、それを生活の中で、保育所、幼稚園から求められる場面で上手に発揮できるかどうかっていうのが、似ているようで実はすごく違うなって感じることが多いのです。

例えば、親御さんとお話をしていると「家だったらできるのですよね」とか「こんな風にやったらできるのですよね」という条件がそろったときにできることをたくさん聞かされますが、子どもたちが自分の力でこれをどんなふうに発揮できるか、が大事なんじゃないかなって考えています。

先ほどもお話したように、私自身が、地域の幼稚園、保育所、学校にいるお子さんたちに関わっているのですが、友達との関係の中で「こういうことができるようになったんだ」と驚くことがあります。

みんなの中できちんとお話を聞いて、自分で動くことができるようになったなど、生活の場面でその子の持っている力が発揮できるようになった、と感じられる時が一番うれしいと思うし、かわいいと思う瞬間です。

先ほどお話した、家だったらできるのにとか、その条件が揃ったらというのがよく出てくる話題ですが、子どもさんの成長について、親御さんと共通理解をはかることは、簡単なようで実は難しいことなのです。

子どもさんのゆっくりなところは、その子のペースがゆっくりなだけであって、出来ないわけでは決してないのです。そこにどういうふうに私たちが、共感できるのかなということが、すごく大事だなって日々感じています。

保護者の方と子どもさんたちが活動する場面で、こういうことができるようになったということを共有できた瞬間が、とてもうれしいし、成長を感じるときです。

高校生活で培われる豊かな表情

熊谷　資料の一番後ろに、高校生の進路が載っています。色々あるということがおわかりいただけると思います。

入学して４月すぐ、進路希望調査をします。高校１年生の子だと、たとえば自分の友達が、北海道大学を希望しているから、僕も北海道大学に、あるいは、うちの親兄弟がどこそこ専門学校に行っていたので、私もどこそこの専門学校というような記入の仕方が非常に多いのです。

緑陵高校･リーダー研修会の様子
（緑陵第 40 号,2014 年より）

その後、11 月ぐらいに、大学・短大訪問という機会があり、１・２年生全部で札幌方面など、それぞれの希望に合わせて見に行きますが、そのときもまだ、どちらかというと自分の友達グループほとんどがここに行くから私もここに行く､僕の仲間がここに行くので、僕も行こうかなと、そういう選び方をします。

けれども､最終的には皆さんのお手元にあるような、具体的な進路希望になっていくのです｡そのプロセス、の中で、先ほど悩んでいる生徒がいるとお話をしましたが、１学年だいたい 200 名ちょっとですけれども、３年間のうちには当然失敗する経験もあります。

その中でも、成績が一生懸命がんばったから上がった、難しいといっていた資格を取ることができた、３年間どこそこ部に所属して体力がないって親から言われたけれど、自分はやり遂げた。ある行事の中心になって自分が成功させることができた。中学校のときに友達と付き合うのが苦手で､うまくいかなかったけど、高校に来て、うまくやっていくことができた。そういうような自信といいますか、経験といいますか、そういったことの積み重ねによって、３年生くらいになると、顔つきや見た目、身長もそうですが、とにかく表情が変わってきます。

言葉や行動も、非常に大人らしい振る舞いができるようになります。まずは気配り、心配りができるようになります。私たちは３年間、生徒を見ているので、ああ成長したな、この子１年生のとき、こんなんだったのに３年生になったらこういうふうになったのだ、１年生のときはなかなか表に出てこなかったけど、最後の学校祭でがんばったな、などと思えます。

また部活動でも、１年生に入ったときには、勝負に全然こだわらなかったけれども、３年生の最後の高体連で、成績を残して、最後悔しい思いをして泣いていたり、あるいはみんなで３年間がんばって、１年生の時よりも非常に表情が豊かになります。

優勝を称えあったり､高校生のそういう姿をみると、３年間の中で大きく成長したなと感じます。

子どもと体験する達成感と自信

増田　子どもたちに自信を持たせるということで私自身の小さな世界ですが、経験談をお話します。

北海道と違って、関東、東京にいますと地震のことに潜在的に恐怖心があります。私は高校のとき、かなりスパルタ教育の学校にいまして、１年生の時に東京の都心の学校から筑波山までちょうど 100 キロあるのですが、その間を不眠不休で歩くという体験をしました。だいたい 36 時間から 40 時間以上かけて完歩します。歩き通す確率が約 50 パーセントで、半分は脱落していくのですが､幸い私も歩き通すことができました。

それが高校生のときの自信につながっています。少し前に、数十年ぶりに同窓会がありましたが、歩き通したグループと歩き通さないグループ、歩いてなかった、歩き通さなかったグループって、未だにあるのです。達成感を、その時味わえなかったっていうことがずっと尾を引いているということを感じています。

たまたまテレビで、同じような行事をやっている他府県の学校で､完歩できなかった人たちが 60 歳を過ぎて、もう一回やると、高校生の時にできなかったのが未だにくやしい、だから、もう一回やるのだっていうのをレポートしているのを見ました。とってもいいことだなと思って見ていました。

そういう経験があったものですから、私の子どもが中学校１年のときに、当時、住んでいた世田谷区から実家がある文京区まで約 25 キロ､お爺ちゃんがいるところまで、中学１年生の息子と朝６時に起きて、８時間くらいかけて歩いてみました。

中学２年生のときは、東京の真ん中から千葉県の我孫子市まで約 50 キロ、そこに私の兄が住んでいます。道中息子にお菓子食べさせながら、へろへろになりながら、もし東京で地震が起きて、パパやママとはぐれたら、この道通っていくとお爺ちゃんの家に行けるよっていうことを言いながら歩いていったのです。

２年目は、お爺ちゃんのうちから兄のうち、３年目は、自宅が東京から神奈川県に引っ越していましたの

で、逗子から振り出しの世田谷のうちまで、逗子から世田谷の家、お爺ちゃんのうち、兄貴のうちってずっとつながるわけで、これって、経験のある方はわかると思うのですが、地図で見たときの距離感が自分の足で歩くということによって、すごくリアルになります。リアリティが湧いてきます。

その後も日本海まで縦断したり、自転車で関西の方に行ったり、飽きないように自転車に乗ったり、いろいろ自分の足で行ってみましたが、自分自身としても、子どもにも経験させて良かったと感じています。

ちょうど３．１１のときに息子は建築家になっていたのですが、皇居のそばの事務所で被災しました。あの時は東京中、関東一円すごいパニックになって、ニュースでご覧になったでしょうが、帰宅難民が続出しました。その時、息子は、住まいがある埼玉県の志木まで、皇居から 30 キロくらいだから、何時間かければ帰れるというふうに、まったくパニックにならずに、帰ってくることができました。

「親父、あのときの１年生、２年生のときの経験がすごく良かったよ」と言ってくれ、私自身も大変ありがたい、良かったなと思った次第です。

同じことを、一緒に空手をやっている１年生の孫ともやりました。逗子の自宅から、江ノ島まで 10 キロ、ちょっとキロ数は少ないのですが、10 キロ歩くと、このくらいの距離感で、これくらいの疲労度で、ここまで行けるなっていうことが、小さい心の中に刻まれていけば、何かのときに必ず役に立つのではないかなと思っています。ささいなことですが、そういった積み重ねって、親にしかできないかなと思っています。

お孫さんとか、お子さんと何か共通体験で親の背中を見せるって大事なことだと思います。とにかく一緒に汗をかいたりすることも大事だと思ってこの経験談をさせて頂きました。

子どもの成長を支えるために

司会　ありがとうございます。それぞれ５名の方、さまざまな場面、さまざまな成長のお話をしていただきましたが、お話している皆さんの表情がすごく素敵でした。ちょっと誇らしげというか、そういう表情ってたぶん子どもにも伝わっているのだと思います。

誰かが自分の事を見て喜んでくれるとか、関心を示してくれるというのが、また子どもの自信になっているということもありますし、私たち大人も、自分たちが支援しているような気持ちになっていますが、実はそこからたくさんの思いをもらっているのかもしれないと皆さんのお話を聞いて感じました。

では、そういった子どもの成長を支えるために、どんなことに気をつけているのかということについて、ここでお聞きしたいと思います。

ちょっと順番を変えて、大野さんにお聞きしたいと思います。たくさんのお子さんにスポーツを教えているということで、いろんな気遣いがあるのではないかと思いますけれども、いかがですか？

子どもと真剣に取り組む遊びとスポーツ

大野　子どもにとって、スポーツというのは遊びなんです。決してスポーツ＝オリンピックじゃない。

子どもはそういう感覚で、とにかく遊びます。遊びですからやっていて楽しくなければ続きません。

子どもがスポーツするときは、楽しいから、とにかく一生懸命にやるのです。子どもというのは決して手を抜かない。思い切って、一生懸命、精一杯やります。そしてもうとにかく負けられないっていう気持ちを持ってやるのでとてもいいのですが、子どもが競技会に出るとなったとき、それを見ている大人がどう言うかというと、とにかく「頑張れ」って言います。

子どもは一生懸命にやっているのに、大人はもっと頑張れと言い、また、なんで失敗したのかなどと言います。サッカーで言えば、なぜシュートを外したのとか、そういう言葉をよく聞かされます。

「頑張れ」というのはすごく単純でわかりやすい言葉ですが、このわかりやすい言葉も、子どもにとっては負担になることがあります。ある程度子どもにも力があって、また、それなりの運動能力があって、それに応えるだけのパフォーマンスが出来ればいいですが、みんながそうではありません。運動能力が高い子もいる反面、運動がだめな子もいます。やみくもに「頑張りなさい」とか、「何故、あそこでそういうふうにしたの」とか、「あなた声が出てなかったじゃない？」とか、そういうことを子どもたちに言うっていうのは、気をつけた方がいいなと思います。

子どもにとってスポーツは楽しむことですから、う

ちに帰って、食事の時間に、今日一日あったこととか、いろんな話をするでしょうが、子どもには、失敗したことは言わず、とにかく「良かった」とか「よく頑張ったね」とか「次また頑張ろうよ」とか「これを直したらまた良くなるね」とか、そういう励ましの言葉をかけることが、大事だなと思います。

私たち指導者も、言葉にはとても気を使います。子どもは、大人の言葉をまともに受けとります。子どもは大人より厳しくて、こちらをちゃんと正当に評価します。

一生懸命に、自分たちにいろいろと与えてくれる人に感謝し、反面、手を抜く人だとか、子どもにとっては許せないようなことは痛烈に判断して、この人はいや、とはっきり言います。大人はずるさを持って、適当にうまく付き合ったりしますけど、子どもはそういうことはしません。とても厳しいのです。

スポーツ教室のときは、ほんとうに真剣に悩んで、真剣に企画を考えてやらないと、子どもがどう思っているかは目を見ればすぐにわかります。子どもにとってその種目が面白いのか面白くないのかが。私たちは、キッズスポーツを通じて、子どもに対する接し方というのはとても大切だなと気づきました。

司会　よく、好きこそ物の上手なんて言いますけれども、子どもがせっかく面白いと思ったスポーツを嫌いになっちゃったらもったいないですよね。その辺、気をつけていらっしゃるというお話でした。

スポーツといえば、先ほどのお話の中にもお孫さんと一緒に空手をやっているなんていうお話がありました。次は増田さんにお願いしたいと思います。

子どもの心を支える孫シッター

増田　あまり孫自慢、ジジ馬鹿の話にならないように注意しながらしゃべっています。まさに現役の子育て世代のとき、私はほんとうに、みなさんもそうでしょうけど、モーレツ時代のやや生き残りみたいな生き方をしていて、あまり子どもとの関わりは持てませんでした。

孫を見ながら、その時やってなかったところは全部やり、人間ってやっていなかったことのツケを最後に払うのかなと思って、今、一生懸命やらされています。

孫は、一日おきか毎日のようにうちに来て晩飯を食べて、日曜日なんか「軍師官兵衛」が始まる前に片付けて風呂に入れて帰さなきゃいけないので、かなり忙しい思いをして、楽しませていただいています。

他人様のお子さんを見ていて、親の顔がみたいなあということがありますが、本当にそういうふうに言われないようにしなきゃなと思いつつ、孫シッターをやっています。

その孫が、１年生になったら「死」というものに気づき始めてきまして、よく言われるジジ馬鹿なのですけど、「ジジは、いくつまで生きるの？」と言うから「120歳だよ。今は折り返し地点かな」と応えると、安心するのです。そうすると、まだ何年大丈夫かと心配します。テレビで芸能人が80代などで亡くなったというニュースを見るとすごく敏感で、「89 歳、まだ若いのにね」なんて言うんです。ほんとうに120歳くらいまで生きるものだと今信じています。私も63歳ですけれども、歳が近い方の訃報が流れると、孫はものすごいショックで「ジジ死んじゃうのかな」みたいな、そういう心持ちといいますか、死に対する芽生え、気づきが

意見交換会の様子（岩見沢市教育研究所）

始まったところです。

そういう孫の心の中を察してあげ、大事にして育てなければいけないなと思います。孫はかわいくてしょうがありません。

孫育ては、なんていいますか、爺が一番いいところにいられます。お父さん、お母さんは現役で、ほんとに本気で怒らなきゃいけないけど、爺ちゃんはいい子になれるので、お風呂入ったときなどは、まさにタレこみ部屋で、「ママがこう言った、ああ言った、ジジなんとか言って」といった話ですね。

そういう子どもにとってガス抜きの場が、たまたまうちの場合は、爺ちゃんなのですけれど、婆ちゃんでも、父ちゃんでも、おじさんでも、誰でもいいのです。

子どもたちが理不尽だと思っていること、自分自身理解ができないこと、誰かに言って消化させなきゃいけない、そういう場は、そのコミュニティの中で、誰かがいなきゃ子どもがかわいそうだなと思います。

僕が小さい時って何となくそれが自然にありました。先ほど岩見沢市の鈴木次長がお話されたように、これだけ行政が子育てについて色々なことを考えていることは、僕らの小さいときは想像も出来ませんでしたし、多分このような取り組みは行政ではなかったかもしれません。

自然に、僕ら育ってきちゃったような気もしているので、今の時代っていうのはこれだけ手取り足取り、行政、それから教育関係の方が知恵を絞って色々なことを考えていると冒頭のご説明を聞きながら、正直感心しました。

司会　ありがとうございます。増田さんはなるべく孫自慢にならないようにと、おっしゃっていましたが、こう言ったら失礼ですが、かなりのジジ馬鹿という感じです。でも、いつも、とってもいいお話だなと思って伺っています。

いま伺った話は、大野さんの頑張らせすぎちゃう家族の話につづいて、お爺ちゃんがガス抜きになっているというお話でした。無理して頑張らせない立場にいるというところが、お爺ちゃんの立ち位置なのかなと思ってお聞きしていました。

じゃあその「頑張る」っていうことですけれども、ついつい「頑張れ」っていうふうに、励まし、せかしがちになってしまうときは、何かの支援が必要なのかなという気がします。

では次に、発達支援のお話、私は今、木下さんとお仕事で関わっていて「頑張る」っていうことについて考える機会が多いのですが、「頑張る」ことについて木下さんの経験からお願いします。

頑張る子どもと欲張る大人

木下　私自身この仕事にたずさわって 15 年、16 年くらいになりますが、作業療法士という医療の専門職という立場で仕事を始めて、当初は、機能的にできること、運動を含めて出来ること、これが出来たねって言えるのを、どうやって手に入れようかっていうのを重視していたと感じるところがあります。

これは専門職だからというのではなく、日々保護者の方、保育所、幼稚園の先生達などとお話する中で感じることですが、大人って、何か出来たときに、ついつい、次を求めてしまうんですね。子どもたちにすれば、ここまでたどり着いてそこが嬉しくて、もっとやりたいって思っているのに、「だったらもっと出来る」とか「やるからには綺麗にやればいい」とか、大人って、知識があって経験もある分、つい次を見据えてしまい、それを子どもに求めてしまう面が多いなと、ここ何年かすごく感じるようになっています。

先ほどの、成長を感じるのはどんなところかなっていうところでも、お話ししたのですが、「出来る」っていうことが増えるよりも、それを子ども達がのびやかに発揮できる場面をどうやって作ってあげるかの方が、すごく大事だろうと思うようになってきました。

昨日も、学校で保護者の方と、学校の先生と、私とで、今後の支援方法について会議の時間を持ったのですが、そのお子さん、授業に参加できる日となかなか参加できない日があって、みんなの中でお話を聞くっていうことにも苦手さがあります。学力としては高いものがあるけれども、それを学校の学習場面で発揮できない、というのをどういうふうに考えてあげたらいいか、というお話だったのです。

そのお子さん自身、家でも学校でも「どうせ出来ないから」とか、だんだんネガティブな言葉が目立つようになってきたというお話があったので、色々と子どもさんの様子を聞いていきました。たとえば書写の時

間の「書き写す」ということ、その時間で求められることを、大人は「綺麗に書く、正しく書く」といふうに考えちゃうのです。

けれども、正しく書くでも二つ課題があるのです。綺麗に書くでも二つ課題があって、彼は、書くことに取り組めただけでも今日は100点だって思えるような、お子さんなのに、ついつい「やるからには」の視点だったり、「頑張ったら出来るじゃない」という視点になってしまう。ちょっと欲張っちゃう大人の目線をいかに抑えられるか、というところが私自身の課題かなって感じます。

あとは子どもさんたちにとっては、ちょっと頑張ったら達成できる、やったら出来たからもっとやりたいとつながる課題設定のさじ加減を考えてあげるというのも私達の仕事だなと考えて、まだうまくはいかないのですけれども、悩みながら頑張っているところです。

司会　ありがとうございます。３人の方からは、頑張る、とか、ガス抜きをしてあげる立場というように「頑張る」というキーワードからお話を伺いました。

次に熊谷さんにお話を伺いたいのですが、高校生になってくると、頑張るっていうシンプルなことではなくて、もっと問題が複雑になってくるのかなと思うのですが、どういったところに気をつけられているのかお聞かせください。

自分で答えにたどり着けるまで待つこと

熊谷　高校生には、当然守るべきルール、それについては守らなきゃいけない、これはだめだよ、ああしなきゃいけないよ、と話をする場面がありますが、やはり社会に出るに当たって、私どもが考えるのは、生徒自身が主体的に物事を捉えて考え、これに対してどうすればいいのだろうかという考え方をもつこと、あるいはそういう主体性のある行動をとれるようにすることが必要かなと最近感じています。

本校の、いわゆる停学指導については、５年くらい前までは、大体１年間で10件くらいあったのですが、去年は１件、今年はまだ０件というような状況です。こうした取組みをすることで成果が出ているのかなと思います。

お手元の資料の中に、生徒指導通信を、いくつか抜粋して入れてあります。例えば、盲導犬が数か所刺されたというような新聞記事を、生徒指導通信に載せて、ホームルームでそれについて考えます。この記事を読み、じゃあこの場面を見たときにどう行動するというような、ちょっと考えさせる場面を持ちます。

また、アルバイトをしている生徒も多く、高校生になるとスマホを持っていて、100%に近いくらい、みんながツイッターとか、ラインだとか、フェイスブックなどをやっています。寿司店のアルバイトさんが、その調理の写真をツイッターに載せたという事件がありました。それをホームルームで、新聞記事のときと同じように「そういうことって、よく使う場面があるけれども、果たして、どうなんだろう」などの考えさせる場面を、多くすると、比較的「わたしはこう思う」「僕はこう思う」「こういったことはこうだ」のように、ある程度自己主張というか、自分はこうだっていうところが、色々なかたちで出てきます。

時には大人目線では適切じゃないと感じるような考え方もあります。そんな時は、もうちょっと時間をかけて、どうしてそれが適切と思われるのか、適切じゃないかもしれない、というところを納得するような形で話しながら、自分自身で主体的に考えて、答えにたどり着く、そうした取り組みを多くした結果が非行の減少にもつながっているのかと思います。

ただ、生徒が自分なりの答えを出すまでには非常に時間がかかります。学校の先生というのは、どちらかというとすぐ答えを出したがります。だめならばすぐ解決させたい、こうしていることについては、こうしたい。でも、やはり待つことっていうのも、時には必要で、待つことで、本人が社会に出たときに、答えを出して自分で行動することができることにつながると思います。

それが、社会の中で必要な思考、あるいは考え方っていうことであれば、主体的に、自分で答えを出す、考えていくということはとても重要です。

その考えに対して、大人がまた少しヒントを与えながら、導いていくっていうことも、必要なのかなと考えています。そういうことに気をつけながら、日々生徒と関わっていますし、悩んでいる生徒に対して、話しかける場面でも、心がけています。

司会　ありがとうございます。考える場面、考える環境をつくって、答えにたどり着けるまで待つということですね。

私達大人は、ついつい子どもを急かしてしまうのですが、そういう時に「待つこと」ができると、子どもはちゃんと、高校生を子どもっていうのがいいのかわかりませんが、子どもは答えにたどり着けるというお話でした。

では最後になりますが、待つというには３人の子育て忙しいですよね、そんなドタバタの子育てをしている清野さんにお願いします。

手は離しても目は離さない子育て

清野　皆さんのお話を聞いていて、日々の暮らしを反省しているところです。ついつい「頑張れ」って言いますし、頑張って出来たときには「なんでもやれば出来るんだよ」って言いますし、ひとつのことが出来たら「次はこれ出来るんじゃない」って言っちゃいます。

言い訳かもしれませんが、朝のご飯も時間がない中で、いろいろな身支度を全部整えさせて、学校や保育園に送り出すとか、帰ってきたら帰ってきたで、早く寝かしつけたりっていうのもありますので、なにかと早くしなさい、早くしなさいと急かす場面も多く、皆さんのお話を聞いて反省しているところです。

その中で、一応気をつけていることがあり、出来てないときもあるのですが、ひとつだけ挙げてみます。

時間のない中で、ついイライラしてしまうので、感情的になって怒ってしまうっていう場面があります。

一般的には「怒る」っていうのと「叱る」っていうのは、違うという話、皆さんも聞かれたことがあるかと思いますが「叱る」っていうよりは、ついつい感情的に「怒って」しまう場面も多いので、ぐっとこらえて、きちんとどうしてだめなのか、こうなんだよっていうような感じで、きちんと叱らなきゃだめだなって一応思ってはいます。怒鳴っていることの方が多いながらも一応気をつけたいなと思っています。

また、子どもが保育園に行っている間は、家のドアを出てから保育園のドアに入るまで、ドアからドアへ、子どもが危険になる場面とかも全くなく、仕事に行くときは預けて、仕事が終わったら迎えに行って帰ってくるため、日中子どもが危険な目に合うとか、そういったことは全く心配ない状態でした。

けれども、さすがに小学校になると、通学時ですとか下校時には１人だったり、お友達と一緒に歩いて帰ってきたり、習い事を多くやっているのであまり放課後に自由な時間はありませんが、習い事のない日など、お友達と遊びに出かけていることもあります。

保育園の時代からみたら小学校に上がることによって、今の時間何やっているのかな、心配だなとか、そういったことを思うことが増えました。

３年生になったとき、学級で懇談会の中で担任の先生からもらったプリントの中に「１年生２年生は、ある意味、保育園のときと同じような感じで付きっきりでとか、ある程度お膳立てをしてあげて、手を貸してっていうような状況が多かったと思いますが、もうそれはやめてください」とありました。

これ以上やってしまうと、自分自身で何もできない子どもになっちゃいますから、もうお母さん手を離してくださいって言われました。それともう一つ、手を離しても、目は決して離さないでくださいっていうことも言われました。

一応、手をあまり出すことはしないようにしながら、、気配りはする、目配りはするのを心がける段階だなって思ってはいるのですが、ついつい手を離したら目も離してしまいがちになります。

それもちょっと難しいところだなと思いながら日々過ごしています。今日はちょっと反省する時間を頂戴いたしました。

司会　ありがとうございます。私も、昔の子育てを思い出していました。いま清野さんから手は離しても目は離さないっていうお話がありましたけど、私は、目を離しているくせに時々手をかけていた最悪のパターンだったなと、昔を思い出しました。

子育てしながら、大人も一歩引いて我慢して見守るっていう大切さのお話をしていただきました。先ほど生涯発達というお話もありましたけど、もしかしたら子どもが先生になって、私たちの発達を試しているのかもしれませんね。

５名の方々のお話をここまで伺ってきましたが、ここでずっと一緒に話を聞いていただきました平野さんにまとめと感想などをお願いしたいと思います。

リジリエンスと子育ての報酬

平野　ありがとうございました。皆さんの話を聞きながらどなたも工夫されている感じがしました。

心理学ではリジリエンスっていう言葉が最近はやっています。リジリエンスって何かというと、逆境が起こったときに、同じことが起こっても、心が折れてしまう人もいれば、そうじゃない人もいる。

東日本大震災でもそうだけれども、同じような経験をしても、そこで心が折れてしまう人と、何とかやっていける人たちがいます。その違いは何だろうか、そのなんとかやっていける力のことをリジリエンスって言うんです。

この力とは、何かが起こらないとわからないってことです。何かが起こったときに初めて、その子どもたち、その人たちが、どうなるかっていうことがわかるのです。先ほど皆さんの話を聞いていて、たとえば木下さん、大野さん、あるいは熊谷さんのお話を聞いていてもそうですが、やはり何かがあったとき、もちろん息子さんの話もそうでしたよね、何かあったときに、初めて自分が誰かからもらったものの意味がわかるというか、でも何事もないことが一番いいのです。

何事もないことがいいと思うのですが、人生必ずそういうときに危機が来て、そういうときに、改めて、ここにいらっしゃる方々がしてくれたことの意味がわかるっていうのが僕は、子育ての報酬だと思うんです。

だから、普段から僕たちは感謝を求めたくなっちゃうんです。子どもたちと関わっていると、こういうことしてやっただろう、お礼は？とか、ありがとうは？とか、でもほんとはあとからわかるものだって思います。

先のお話でも紹介したウィニコットが言っています。赤ちゃんは、おっぱいをくれたとか、子どもは、あのときに何々をくれたとか、くれなかったってことは覚えているんだけど、そういう文句を言っているあいだ、ずっと抱え続けてくれていたことは覚えてないって言うんです。

赤ちゃんだったら、おっぱいをくれたとか、くれないってことは覚えていても、その時くれようがくれまいがずっとお母さんは抱き続けてくれた腕のことはだいたいもう忘れちゃうというのです。

だからたとえば思春期の子どもだったら、大人にいっぱいチャレンジしてきますよね。それでも、親であることをやめずに、先生であることをやめずに、ずっとそれを見守りながら、腹を立て、時にはぶち切れ、それでも、親であり続け、先生であり続けてくれていることは、意外と気づかれないのです。

そうした大人の役割を僕は大人の仕事だと思います。一流の大人の仕事っていうのはそういうものじゃないかなと思うのです。子どもたちがあれくれない、これくれないってことだけで揺れ動くんじゃなくて、それでもずーっと、ずーっと子どもたちにとって必要なことだと思うことのために、ときには嫌味の言える人になったり、ときには素敵な人だって言われたりしながら、それでもずーっと大人としてあり続ける、というのが大事だということを、今日皆さんのお話を聞きながら、思い出していました。

ここにいらっしゃる方々もたぶんそういう大人の仕事をして下っていることでしょう。子どもが後から振り返ってみると、あの時あの人から教わってきたことが「ここに出てきちまった。チクショー」と思うような、リジリエンスのひとつになることを子どもたちに提供できるような大人になれたらいいなと思います。そう僕自身も思いながら、今日のお話を聞かせてもらいました。どうもありがとうございました。

司会　ありがとうございました。また、会場の皆様には、第１部から２時間半、お付き合いいただきまして、ほんとにありがとうございました。

基調講演をして下さった平野さん、そして５名のパネラーの皆さん、今日は本当にありがとうございました。皆さん大きな拍手をお願いいたします。

それでは以上を持ちまして、本日の子ども子育て支援セミナーを終了いたします。本日はご参加いただきまして本当にありがとうございました。